

拜み出す保育

——フレールベルを記念しつゝ——

齋藤善太郎

人類に、さしあつて我が祖國の人々に、本當にいゝ人になつてもらねばならぬ——然ういふ念願にもえながら、フレールベルが幼稚園を始めてから、はやくも百年の月日は流れて、人々によつて其の記念がなされてゐるやうであります。ブリュウフェル氏は其の當時のこゝを匂はしくも次のやうに傳へてをります。

「この巨大な計畫を持つてフレールベルは一八三七年ブランケンブルクへ來た。彼は明瞭に確信した。一つの高い美しい目的が彼を廳いた。(中略)そこで『獨修學校』なる名の下に彼は教材作成のために一つの實業的事業を、ブランケンブルグで始めた。その際漸次彼は就學年齢前の子供に範圍を局限した。一般に人類の教育を高めるこゝ、まだ漠然とした考は、子供をその生れた時からすぐに適當に働かせるこゝ、新に狭く局限された目的の前に、今は消滅した。今や彼はその事業を『子供及び少年の活動衝動を育むための施設』と名づけた。」

「フレールベルは婦人を最初の子供時代の哺育者たる天職を有するものゝ考へた。婦人本來の高い文化的天職は、既に發芽しつゝある人性を、意識的に新しいより高い人性にまで育て上げるにあると認めた。そこで彼は熱狂した言葉で獨逸の婦人や娘たちを呼んで結合させ、一つの強力な同盟を作らせ、かうして群集の力によつて、また習慣によつて、あらゆる母、最も忘情な母をさへ、その子供たちを適當に教育せざるを得ないやうにしやうとした。」

(ついでとあり、しかも幼稚園なるもの、活ける背景を、源流的にさとらしてくるどころですから、いまして引用します。)

「彼が一八四〇年六月二十八日にその『一般幼稚園』を創立した時、彼の意圖はこれであつた。この巨大な同盟の中心は一つの立派な學校、——フレヨエベルはこれをブランケンブルクに創立しやうとした——いはゞ女性の大學なる筈であつた。この獨創的計畫は残念ながら金がないために畫餅に歸した。そこでこの大きな堂々たる學校の代りに、フレヨエベルは四十年代に多數の幼稚園を創立した。これらはそれ自身が目的ではなく、單に目的のための手段なる筈であつた。これは母親たちにまつて眞の子供の教育に於ける觀照の場所なるべき筈であつた。決して單なる小兒預り所なるべきではなかつた。今日なほ多くの素人は國民幼稚園をさう思つてゐる。單に小兒預り所を創立するだけのこゝならばフリードリヒ・フレヨエベルの如き人物を要しなかつたであらうし、その上このやうな施設は當時既に多數あつた。」

(茅野蕭々氏譯「母の歌と愛撫の歌」一八六頁)

我等の記念——念こころに記して、故ふるきを温たねつゝ更に新あらしきへ進すすみゆかしむる記念に、多くの指示ミカミを與へてくれる敘述であります。フレーベルの念願はきんなに大きいものであつたか、造られたのではなく生うれた、眞の教育者としてのフレーベルの遠い展望はきんなに廣く輝かしくまた深いものであつたか、若々しい血ミ祖國愛に燃えながら「我が獨逸」を守るために戰陣の野營の夜の焚火をかこみつゝも祖國ミ人類ミの教育を友ミ談じあはずにはをれなかつたフレーベルの敬虔なる人間愛は、如何なる目標をめざしつゝ其の計畫をたてゝるたか、それらの熱ミ力ミ深さミ大きさを我々のまへに示してくれる敘述であります。げにフレーベルにまつては、後に、一八四〇年に、幼稚園なる名を負はせるにいたつた施設は、まさしく人間の教育の第一歩であり、その第一着手であり、しかも其れを人類の名に於てなしてくれるはづの「女性」「母性」によつてなしてもらはう、其のための研究所にせやうといふものであつたのであります。

附けたりであります。ここに、ナポレオンの重歴のみに祖國獨逸が危くも國難に面して、そのために愛國者フィヒテが、ナポレオンの軍鼓の音を窓外に聞きながら「獨逸國民に告ぐ」を烈々き語りつゝあつた時、それに血をわかせたであらうフレーベルを、(一八〇七年、また、人間の教育さいふ大なるブランを腦裏に展開せしめながら、其の教育に就いての第一卷、現存の「人間の教育」を書き終へやうとして、人間の人間たる所以のもの、「人間の本質、その神的本質」を實現せしむることに我等は專念すべきである、そして、そこに至る「道」方法を證示し、而して其れを實生活に日常の現實の中に導入することに、本書の續篇および本書の著者の生涯は獻げられてゐる」(レクラム版「人間の教育」四五六頁)さいふ意味のこゝを記してゐたフレーベルを(一八二六年刊)其れは實現されずに終つたのではあるが、併せて想起し記念したいのであります。

眞の智慧を愛するために嘗て「カントに歸れ」さいふ聲を聞いたやうに、保育、教育に關して「フレーベルに歸れ」さいふ聲があるやうであります。少くも幼児については、此の聲が其の眞義を鮮かにしつゝ、もつゞ／＼あげられることを、心から望みたく思はずにはをれないのであります。フレーベルも歴史のなかの一頁の人で確かにあります。しかし其れゆゑまた歴史的地位をもつて永久に輝いてゐる大いなる星として、今の私達の脚下にも指導的光を現におくつてゐるのであります。何氣なく日々の保育に、無心に熱心に、幼児に一切をさゝげて當つてゐて下さる方々の其の保育のさなかに、「まごころ」を以て眞理として、フレーベルの魂が現に生きてゐてくれるのを見ます。それゆゑまた、「まごころ」「眞理」を以てのフレーベルを、脚下の心裏中より磨き出しあつてゆきたいを念願するるのであります。さういふ記念のよすがにも、フレーベル先生に聴くこゝろで、二三、「人間の教育」から讀みあつてゆきたく思ひます。いろ／＼な意味、見地

から、いろいろに拾ひ讀んでみたいのでありますが、「拜み出す保育」いふ立場から——おもふに、さういふ立場が、フ
レーベルの根本精神を現はし得ると思ひますので——抄讀しあつてみることにします。

後に「恩物」を以て整へられるに至つたものゝこゝを述べてゐるあたりに

「人間の内なる精神を自分の外にむかつて、素材に於て、また素材を通じて表出しやうとするには、人が物體的空間的
なるものを精神化するこゝから始めねばならぬ、すなはち、さういふ空間的物體に生命を與へ、精神的なる關連を意義
を與へるこゝからして始めねばならぬ。」
(三五四頁)

さういふ意味のこゝろがあります。物を以て形をなしてゐる物體的空間的なるものに「生命を與へ」、諸物を以て命無きかに
バラ／＼に在るものに生命を與へ、精神的連絡を統一を現はさしめてゆくこゝを、小供をしてなさしめよう、人間とし
ての子供をしてなさしめやういふのであります。すなはち、フレーベル風にいへば(後に引く巻頭の數節を参照されたい)本
來存する精神、物の中にも存する精神を、眞に發現せしめやうと念願するのであります。そのこゝを人間としての幼児を
して、若しくは幼児を通じて現實ならしめやういふのであります。さう念願し、さう努めつゝあるフレーベルにまつて
は、子供は、幼兒は、まさしく天地の法あめつちのりの中にあつて、其の天地の法を實にすることに參すべき、尊き存在にして、まづ
拜まれてゐるのであります。かういふフレーベルの拜み方は、初期のものにしての「人間の教育」にしても、後期のものこ
しての「母の歌」愛撫の歌にしても、其の至る所に見らるゝこゝろであります。技を單なる理窟であるかに思ひなさる
ゝこゝろ無きにも非ざる恩物關係の箇所に、その裏を流るゝフレーベルの心を感じたく、こゝをぬいてみたのであります。

ついでながら、「恩物」は良い名であると思ひます。恩賜のもの、ありがたくも贈られたもの、さういふ心が殊に

りだされてゐて、一應は熟さぬ言葉のやうでありながら、良い名であると思ひます。原語では *Game* になつてゐます。それを「母の歌を愛撫の歌」の譯者は、原語原文の獨逸的感じを全體として出して下さりながら、「贈物」を譯してをられます。

遊びに就いて述べてゐるところに次のやうな言葉があります。

遊ぶあそぶといふことは、遊びあそびといふものは、子供の發達、すなはち人間の此の時期における發達としては、最高段階に屬するものである。こゝの遊ぶは、遊びは子供、若しくは人間の内部を自發的に自由に表出したもの、すなはち内部そのものの必要を必然性からして生じた内部表出だからである。そのこゝは遊びといふ言葉そのものによくあらはれてゐる。

遊びといふものは此の時期に於ける人間の最も純粹なる精神的所産である、同時にまた、人間生活全體の既往及將來の映像であり、人間及萬物中に存する、内的なる、秘められたる自然の生命の、既往及將來の映像である。(七五頁)

「遊ぶあそぶといふこと、遊びあそびといふもの」の重要な意義は既によく知られてゐることでありますが、こゝの數行から私の讀み取りたく思ひましたのは、「遊び」は一ついでながらですが、「遊戯」と云つてしまつてもいゝのでせうが、今私達の周圍では然う言ふと一種の型が聯想されすぎるので、原文で、動詞形の名詞と名詞形の名詞とをなつかつてゐるのを、そのまゝ置き代へて、しかも「遊ぶといふこと」とか「遊びといふもの」とかわざと云つてみました——その「遊び」は、人間としての生活の全體を現はして(表出して)ゐる、しかし「既におくつたところのもの」を「これからおくらうとするもの」を映像的に現はしてゐる、こゝでいふことではありません。しかも讀みすぎかもしれないと思はぬでもありませんが、たゞ單に「人間の一生を練りかへすものだ」といふよりか、フレールフロアのいはゆる「人間性そのもの」もしくは「人類性そのもの」、かくありたい、あるべきものを、求めて、

えがき、たてられたところの一つの人間性若しくは人類性の理念としての Menschheit そのものが、無心なる幼児を通じて、(あのギリシヤの底知れぬ麗しき深き海の中より神々しくも美しいヴィナスの生れ出づるが如く)現はれ出づるのを、敬虔に拜したうさいふ氣持が、少くもフレールベル的にはそこに含まつてゐると思ふのであります。すなはち、子供さいふものを本當に拜するが如く尊重しつゝあることを、行文の底に感じらるゝのであります。また、いまひこつ讀みこりたく思ひましたのは、「人間の中には、固より、あらゆる物の中に存する自然の生命がおのづから現はれて来る、すなはち(後に云ふ巻頭の數節のところを是非参照していただかねばならぬのであります)此の天地の間に存する「精神」が眞に精神として實存するためには、「もの」としての「自然」を「こころ」にしての「精神」を「つ」にするものたる「人間」によつてゝあり、「人間」を通じてゝあるが、さういふものとしての人間の子供、無心なる人間としての子供の、無心なる、しかし内部的な要求も必然性もにそよごかされながらする、止むに止まれぬかたちの遊びにおいて、「自然の生命」が現はれ出で、来る、さいふこころであります。すなはち無心にして物言はぬかたちの幼児を通じて、天地の法が實にされるさいふこころで、子供の生活を拜し扱はうとする態度のこころであります。

よく御存じの、「人間の教育」の巻頭のこころに、次のやうな、創成記のおごそかさを持つ數行があります。

「あらゆるものゝ中に、一の永遠なる法則が、安らひ、活らき、ゆきわたり支配してゐる。それは、内界すなはち精神におけるこおなじく、外界すなはち自然のうちにも、しかうしてまた、此の内外兩者を一如のものたらしむる生のうちに、恒におなじく明らかに、また定かに、顯はれてゐるのであり、また顯はれてゐる。(中略)

「かくいたるこころに徧くゆきわたり支配せる法則の根柢には、必然、一のいたるこころに活らき、自明にして生々たる、

自覺的にして、したがつて永遠に實在せる統一が、横はつてゐるのである。(中略)
 「此の統一が神なのである。

あらゆるものは此の神的なるもの、神より出で、をり、而してひきつびきつに此の神的なるもの、神によつて制約せられてゐるのである。神の中にこそ萬物の唯一の根柢は存するのである。

あらゆるものゝ中に、神的なるもの、神は、安らひ、活らき、ゆきわたり支配してゐる。

あらゆるものは、神的なるもの、神の中にあつて、安らひ、生き、成り立つてをるのであり、また、そのもの、神を通じて、しかなつてゐるのである。

萬物はたゞ、その中に神的なるものゝ存し活らけることによつてのみ、存在するのである。

かく各々のものゝ中にあつて活らける神的なるものこそ、各々のものゝ本質なのである。(三〇頁)

ちよつと、きりつきづらゐる所でありますが、フレーベル精神の眼目であり、まさに要領、すなはち其處をさらふれば他ののづからにして把握し得るどころであると思ひます。私が假りに「拜み出す保育」いふ言ひ方にして表はしてみたフレーベル精神は、すべて此處を根源として、今も生きてゐると思ひます。

こゝを思想的背景からして領解することは研究的に大切なことではありますが、それはそれとして、今こゝでは、無心になつて、まさにフレーベル先生に聴き入りたいのであります。先生はまづ言はれます。

一つの法則、法が天地を貫いてゐる、其れは精神のうちにはもよより、自然のうちに、そしてまた、精神をして自然に於て眞に精神たらしめ、自然をして精神によつて眞に自然たらしめつゝ、その兩者を一にしゆく人間の生のうち、太初より存し、今も現に存し顯はれてゐる。

いろいろなる誤解の妨げから自由になるために、「法」^のいふ言葉を想ひ浮べながら、心空しく眞澄みの秋空に觀入るころで讀みかへし讀みかへししてみたいと思ひます——まづ「法則」、「法」^のを言ひながら、フレーベル先生は如何に苦心して天地^{あめつち}と其のうちななる物の實相との前に我々を連れていかうとして下さるか、そして、種々なる躓きなく、素直に其の「法そのもの」に觸れさせるために、

其の法の支配の根柢には、必然、一の統一がなければならぬ。

ミ、我々の心に入れて下さりながら其れを領得せしめてくれようとしてをらるゝか、そして、用意深く我をこゝまで連れて來て下さつてから

其の統一が即ち神なのである、

と言つてをられます。そして正に創世記のおごそかさ^をを以て、諄々ミ、敬虔に斯う言はれてから、人間の教育の根本原理を我々のまへに展示してくれるために、

あらゆるものは此の法^のそのもの、こもいふべき神的なるもの即ち神^{より}出で、

いな、其の法、神の中に在つて、其れは包まれ、生かされ、其れによつて動かされ、成らしめられつゝ在るのである。ものゝ、そのものたる所以の本質は、まさに此の神的なる法、神こそ、其れである。

ミ、我々の守り育て、引き出すべきものたる人間の本質^をミ、それに如何に對すべきか、すなはち拜み出す如くに對すべきことを、フレーベル先生は、敬虔に、諄々ミ我々に今も教へて下さるのであります。(ホンの抜き／＼しか讀みあはなかつたのでありますが、こゝだけは、原文的に、苦勞しても讀んでみねばならんミ、心から望まれます、こゝいふのは單なる思想、こゝいふよりか、こゝの言葉を通して、すなはちフレーベルを通して、訥々ミ眞理が現はれてゐる、己れ自らを、眞理

が語つてゐるさいふ氣がし、しかも、洪大なる眞理が不束なる器としての言葉を辛うじて借りながら語り出でゝゐるさいふ感じで、したがつて、其の訥々たる言辭の間より洩れ來る生々たるものに直接したいからであります。

「拜み出す保育」そしてこのフレーベルの心を抄讀してみたい所はまだ幾つもあります、長くもありませんから、これだけにするさしまして、兎に角、かういふコツで讀んで行くならば、「人間の教育」は、フレーベルのものは、本當に我々の今の脚下に指示の光を投げて、我々を深め高め、我々をして眞に我々の仕事にふさはしく生かし、力づけてくれると思ひます。そして聽きます時、

我々は子供から學ばうではないか、子供等の生活が我々に氣づかせ、識らしてくれることを、我々はよく耳傾けて聽かうではないか、子供等の和らかきこゝろが、しづかに求めつゝあるところに、度しく耳傾けつゝゆかうではないか、我々は、子供のうちに、子供にも、生きやうではないか、さうするならば、子供等の生活は我々に、安らかさ喜びを齎してくれるであらう、そして然うすることによつてはじめて我々は聴くなり、聴くあることになるであらう。

(一―二頁のあたりの大意)

さいふフレーベルのこゝろを、耳のそばに、心にしみて聽かされるやうに思ひます。

ついでながら、右の大意のところに、「我々は子供のうちに、子供にも生きやうではないか」、こぼれてみたところは、今墓碑銘ともなつてゐるさいふ有名な言葉

Kommt, lasst uns unsern Kindern leben!

さいふ言葉に當るものであります、これに就いて英譯者ヘイルマン氏(英譯書八九頁) Come, let us live for our

children を譯してから、面白い註をしてをられます。すなはち、原文の unsem kindern は第三格で「我々の子供等」だ「こども」云ひませうか——英語の前置詞では、即ちつゝましく心こめて、子供等「こども」で「こども」云ふ意味を、即ち「子供等の中に、吸ひこまれて、夢中になつて」こども云ふ意味を、with 即ち「子供等と共に、一つになつて、融けあつて」こども云ふ意味があるのであると言つてをられます。フレーザーもほゞえみながら、肯いてくれるかもしれない註であると思ひます。(琵琶湖畔における保育研究會席上の講話の意を記す。十月十一日京都)

會 告

本會發行「日本の旗」日の丸の旗に就ては多大の御支援を感謝します。就ては豫告の通り、その賣上金額として、金壹百圓也を不取敢獻金いたしました。之れは御購入下さつた各位の御獻金に他ならないのでありまして、此の段御報告申し上げます。尙ほ引きつゞき御支援願ひます。

昭和十二年十二月

日本幼稚園協會